

2017年度 シンポジウム報告

運営委員長 鈴木 聡（東京学芸大学）

去る10月29日（日）、一般社団法人教育支援人材認証協会2017年度シンポジウムが開催されました。今年度は、「地域で必要とされる子ども支援人材」と題し、教育支援の必要性を確認し合う会というコンセプトで行いました。当日は、台風の影響で悪天候の中での実施となりましたが、約50名（スタッフ含）の参加があり、盛会となりました。

はじめに、深谷昌志先生（東京成徳大学名誉教授）から「子どもを支援するとは」という演題で、シンポジウムの趣旨説明をしていただきました。大人のやさしいまなざしや一言が、その子が生きていく原動力になることもあるというお話が印象的でした。地域の大人が子どもたちを「支える」ことは、子どもの成長にとって大きな意味があることが、深谷先生ご自身の体験や調査データからお示しいただき、再認識できました。体験活動では、大人が用意したプログラムをこなすことだけでなく、例えば「何もしない日」を設ける、「子どもにやりたいことを自分たちで考えさせる」というような構えも必要であるというお話は、子どもたちの主体性を伸ばすことの本質的な意味を改めて考えるきっかけとなりました。

続いて、本協会理事、NPO法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長の生重幸恵さんから、基調講演をしていただきました。教育界における制度改革や「立場を越えてチームで取り組む意義」について大変わかりやすく解説いただき、どのように具現化するかについての方法も紹介いただきました。多様な大人が子どもに関わることでたくさんのやさしい視線が注がれる、それが子どもたちの安心感につながるというお話は、子どもを支援する意味そのものだと思います。学校においてはキャリア教育という視点から、様々な人材が教育に関わることの必要性を具体的な事例を示していただきました。制度が改革されてもその本質的な部分は、「子どもたちを支援する」という実践的な取り組みの中で、「今まですでにやられてきたことである」というお話は大変心強いもので、参加者の方々へのエールとなりました。

続くパネルディスカッション「地域で必要とされる子ども支援活動」では、あきる野サマーチャレンジ実行委員長の遠藤隆一さんから、活動の様子を報告いただきました。子どもたちを支え、育てていく際に3つの「きょういく」があるというお話は、心に響きました。「共育（子どもと共に学生スタッフも、大人も学び合い育つ）」、「協育（学校・地域・家庭で連携し、社会全体で子どもを育てる）」、「郷育（秋川流域の自然・伝統文化に触れ、有形無形問わず地域で育てる）」の3つです。「ふるさとを誇りに思う人づくりと、あきる野の香りがする『あきる野っこ』を育てる」というコンセプトによる活動を、写真や動画を用いて具体的に紹介いただきました。今回は100kmを歩くという実践です。報告では、スタッフとして参加された学生の方、実際に参加した小学生の方、そしてそこに参加させた保護者の方の「生の声」もお聞きすることができました。まさに、子どもが育ち、学生が育ち、大人も成長するという大きな「ナナメの関係」で、地域での教育が実現していることが伝わりました。

続けて、東京学芸大学の杉森伸吉教授から、社会心理学の立場で体験の意味を価値づけしていただきました。話題提供の中でちょっとした心理実験も入れていただき、説得力のあ

るお話でした。「同じ体験をしても捉え方や感情は人それぞれであり、そのこと自体に大きな意味がある」ということをわかりやすく解説していただきました。

その後、参加者全員で意見交流を行いました。前半は、サマーチャレンジの報告に関する質問、意見を交換しました。成功体験のみを求めない活動も重要であることや、大人が安全面を徹底的に担保した上での活動を行うことの重要性、地域の活動であるからこそ、学校の二次体験ではなく、自由で大胆な取組みをさせたいというような意見が出されました。後半は、このシンポジウムの柱の一つである、「実践を報告する意味」について議論しました。子ども支援学会（仮称）を立ち上げることを想定したときに、その会には何を期待するかという視点でもたくさんのご意見を頂きました。「成功事例だけでなく、失敗事例から学べることもある」という視点は、数名の方から出されました。また、実践を「報告する」ことの意義については、客観的に活動をふり返ることができ、さらには他者からの意見をもらうことで明確な次への指針を立てられることに良さがあるということも述べられました。学会のような場に期待することとして、子ども支援士等の認証を得た後もスキルアップにつながる研修が提供されることに期待がよせられました。また、実践自体の報告に留まらず、実践における子どもたちの変容について、科学的なデータを示しながら効果を見ていくような「体験の科学」という視点も大事であるというお話も出ました。

終盤には、コメンテーターの一般社団法人日本プレイワーク協会代表理事及川研先生（東京学芸大学教授）及び基調講演をしてくださった生重さんから、意見交流会に対するコメントをいただきました。実践報告では成功事例と失敗事例の両方が語られることが望ましく、その積み重ねからよりよい実践を追究することが大事であること、こうした活動は、地域丸ごと広め、育てていくことが理想であり、イベントとして提供しつつもやはり子どもの自主性、主体性を伸ばしていくことは外せない理念であることが確認されました。最後に深谷先生が述べられた「子どもの声が聞こえる町」を再びつくりたいという言葉は、参加された方全員が共有した思いであったと思います。

たくさんのご参加に感謝いたします。